幼児たちから学ぶ

かずかずのこと ③

―水色のノートから―

丸山ふみ

あま蛙と幼児たち

雑草が幼児たちの足元をかくしてしまう程伸びてくると、園庭の木蔭に集まってくる幼児たちが増えてきます。

この頃になると、てんとう虫・蝶・かたつむりが幼児の遊び仲間に登場し、その中で男児たちの人気をあつめているのがあま蛙で、そのあま蛙で私は失敗をしてしまいました。

てんとう虫を遊び着の胸に「ブローチみたいやろ」と止らせてみたものの、パッと逃げられ大さわぎをしている女児達のグループには目もくれないで男児達はあま蛙を追っかけます。

「園長先生もやろか」とポケットの口を一杯開いてみせてくれるユウちゃんの表情は得意満面です。ポケットの中には、二、三匹のあま蛙が入っているらしくふくらんでおり、まわりにいるシェンくんや、タケシ君達も同じように摑まえているらしく、いずれも手でしっかり押さえています。

ユウちゃんの言葉に思わずポケットの中へ視線を移したものの、どうも〝有難う〟とか〝どれをいただこうかな〟なんて言えません。匂ってもこないのに生臭く思いました。わずかに細い蛙の脚と緑色の胴が重なりあっているのが目に入っただけなのですが。

無言で立ちすくんだ私の姿から幼児たちはそれぞれ何かを感じとったようで「やめた」と走り去ってしまいました。

ほんの一瞬のこのできごとが私にとってはショックで、走り去っていく三名の男児の後姿を目で追いながら「園長先生やろか」と飛びついてこられたのに、蛙の肌ざわりを勝手に想像して避けたことを後悔して、今と反対の行動を心の中へ描いていました。

「ありがとう、どれが一番大きいかな」「あま蛙はね、ほら後脚にしか水かき付いていないのよ」とか言って私の手にもらったとします。そして掌の中へあま蛙をつつみこんでも、

その先がどうしていいかわからず、きっと草の中へ逃がしてしまうことでしょう。あま蛙を摑えても遊ぶという経験が自分に無いことに気付いたのでした。

小学生の時、お玉じゃくしを小川でとり、「足がでた、手がでた」と喜んだ記憶や、幼児とともに生活するなかで、お玉じゃくしから蛙へとという飼育の経験はあっても、遊びの仲間にしたことがなかったのです。

幼児たちが身近な動植物に愛情をもち、いたわり、たいせつにすることが必要で、今の幼児たちの生活に自然とのかかわりが失なわれつつあるといって、このままではいけないのだと三人組を追いかけました。

やっと、低鉄棒のところで、ユウちゃんに追いつき、その前にまわって息をはずませながら、「あのね、その蛙たちポケットの中ではかわいそうなの。草の上へ出してやって」と頼みました。

ところが、「いややもん」「僕らがとったやで、僕らのもんやもん」「先生は関係ない」と口々にでるのは抗議の言葉です。その上ポケットを押さえた手には、益々力が入っていき、もう蛙は死んでいるかもわかりません。

私は、すっかり慌ててしまい、「あのね蛙のお母さんが、きっとさがしているわよ」というと、この言葉は見事失敗でした。

「園長先生、この蛙、子どもとちがうの。あのな、皆、同じやよ」

「そう、皆同じなの。そしたら、全部ここへ出して先生に見せてよ」

この頃には、幼児の気持とはっきり対立している自分の感情に、〃生命を大切にすること〃を教えているのだというベールをかぶせてみたものの、これしか方法がなかったのかという、ためらいが私の表情にでていたと思います。

動かなくなったあま蛙に興味を失いながらも、私の行動に四歳児は立ちすくんだようで、この十分たらずの間のできごとで、生きているのだということは、動物の生き方に目を向け、餌を食べ糞をし、卵や子どもを産み、だんだん大きくなる事実があってこそ、生命を大切にすることがわかるのだと反省したのでした。

（松阪市立松江幼稚園）